

## 6 コートジボワール

### 発達した近代的交通網

原口武彦

#### 隣国と結ぶ鉄道

コートジボワールの地図を拡げてみよう。鉄道は首都アビジャン市を起点に北に向かって国境を越え、隣国ブルキナファソの首都ワガドゥグまで一千キロあまりの単線のレールが敷設されているだけである。

V アフリカ  
この鉄道は古く、一九〇四年に着工し、両大戦間には全線が開通している。熱帯雨林地帯を切り拓いていく当時としてはかなりの難工事だったと思われるが、植民地政府は、かの悪名高き強制労働を駆使してこれを完成させた。だが、その後の保線管理がよくないらしい。数年前、ワガドゥグまで一昼夜かけて比較的のんびり走る特急の寝台車を利用したことがあるが、上部寝台だったこともあり、横揺れが激しくて、一睡もできなかった。列車に乗っていて怖いと思ったのはこのときだけである。この鉄道は、今日ではブルキナファソからコートジボワール南部に向かう大量の移動労働者の往来にもつばら役立っている。

# African Africa

ABIDJAN TEL 33.52.00	ALGERIA TEL 21.42.22	AMSTERDAM TEL 20.14.80	CONAKRY TEL 21.01.00	LAGOS TEL 21.10.40	MADRID TEL 72.00.11
BAKINGI TEL 22.50.01	DARAJ TEL 22.10.40	BRASAVILLE TEL 21.47.00	DISCOBA TEL 095.72.00	MONROVIA TEL 22.00	NEWARK TEL 820.84
BOGOTA TEL 50.20.77	BOULAKI TEL 50.13.71	BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71	BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71
BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71	BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71	BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71
BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71	BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71	BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71
BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71	BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71	BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71
BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71	BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71	BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71
BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71	BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71	BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71
BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71	BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71	BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71
BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71	BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71	BOULAKI TEL 50.27.85	BOULAKI TEL 50.13.71

**AIR AFRIQUE**  
THE BEST NETWORK TO AND ACROSS BLACK AFRICA

エール・アフリックの航空網  
(エール・アフリックの時刻表より)

週四〇便の国内航空

現代の交通機関の花形は、なんとといっても飛行機であろう。一部の周辺諸国の首都との間を除いて、この国の国際線を司っているのは、フランス語圏西アフリカ諸国が共同出資で経営しているエール・アフリックである。たまたに機内に日本語による掲示もある機に出くわすことがあるが、それは日本との間の便に使用されていたエール・フ

ランス機の払下げ機であることを示している。

アビジャン市を中心に国内の主要十数都市を結ぶ国内便は、コートジボワール国営のエアール・イボワールが週約四〇便を運行している。使用されている機種の種類はほとんどは、中型のジェット機であるが、地方都市の空港のなかにはまだ未舗装の滑走路もある。バナナなどを満載した特大洗面器を頭に載せた婦人がゆらゆら滑走路を横切っていたりする。

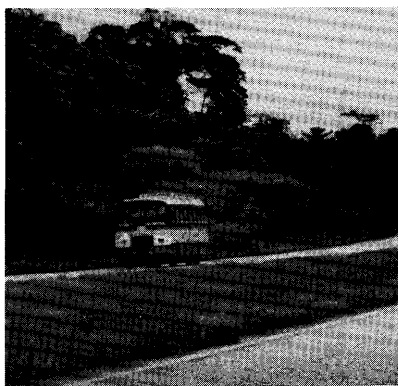
ジェット機がラテライトの赤土をあたり一面にまきあげて離陸し、次の寄港地までわずか数十キロ飛ばらずのため、高度三千メートルぐらいで低空飛行をする機中であって、眼下のギニア湾の波打ち際をながめながらジェット機のスピード感を味わっていると、なんだかとても贅沢をしているような気分になる。

**長距離バス** 庶民の足として最も重要なのは、国内五千キロ（コートジボワールの道路交通網の発達 事情はおそらく西アフリカ随一といつてよい）の舗装道路を中心に全長五万キロの国内道路を疾走する大型バス、ボックスカーを利用したミニバス、またはタクシ・ブルスと称するヴァン型の乗用車を利用した乗合タクシーである。アビジャンの西方、約六百キロのマン市まで、飛行機だと片道一万八〇〇〇CF Aフラン（一フラン＝約〇・五円、一九八九年現在）かかるが、バスならば三五〇〇CF Aフランで済む。時間を豊富に所有する庶民は、たとえ一〇時間かかろうとも、よほどの緊急事態でないかぎり、陸上を選ぶことになる。

マストドントと呼ばれる大型バスは、全国で一五〇〇台あまり（一九八八年現在）、いずれも

一〇台内外のマスドントを所有する中小の業者（約一五〇社）の手で運行されている。最近ではやや過当競争気味で、顧客獲得のためクーラーはもとよりビデオつきのバスも登場している。もっともこのビデオはブルース・リーなどの活劇ものが多く、イヤホーンの設定はなく車内に大きな音量で放映されるので、ありがためいわくに思う乗客も多い。ガーナ、ナイジェリアなど近隣の英語圏が一九七〇年代にいずれも左側通行から右側通行に転換し国際交通も容易になり、人々の往来も盛んになってきたことから、最近国境を越えガーナ、トーゴ、ベニンの諸国を通過し、ナイジェリアの首都ラゴスまで、約一千キロのギニア湾沿岸道路を走破する国際マスドントの運行もはじまった。内陸には、マリの首都バマコまでと、ブルキナファソを通過しニジェールの首都ニアメに至る国際マスドントが運行している。運賃はナイジェリアのラゴスまで片道三万CFAフランである。この路線の主な利用者は雑貨貿易に従事する商人たちであるという。

このような長距離バスの運行が盛んになれば、当然これをねらう悪人も現われる。人里離れたところの路上に、大きな石をころがしておきバスを止め、乗客を襲うとか、強盗の一味が乗客になりすましてバスに乗り込み、示し合わせた地点で運転手に銃をつきつけバスを停めさせ、待ち伏せしている仲間と合流して乗客を襲うなど、さまざまな手口が開発されている。これに対する防衛策として乗客リストの作成、所持品の検査、乗客一人五〇CFAフランの強制保険などの措置が講じられている。また北部の町では夜間は同じ方向に向かうバスが集結し、列をなして次の



高速道路を走るマストドント、  
手前の草地は分離帯

町まで街道を走るなどして、賊に対処している。

都市の公社バス 約一千万のコートジボワール人口の二五%が集中しているアビジャン市のス、ミニバス 都市交通の中核は、SOTRAの略称でなまれている公社のバスである。運賃は一部の遠距離を除いて一律一〇〇CFAフラン。通勤定期券は一月一万CFAフラン（公務員の場合は国家が六二〇〇CFAフランを補助）だが、この定期券は日曜日一日中と、平日の九時から十一時までと、午後十時以降は無効というから、なかなかがつちりしている。このよう

な厳しい経営管理のおかげか不況下のコートジボワールにあつてこのSOTRAは、一九八七年度延べ二億九三〇〇万人（前年比九・三%増）の乗客を運び、一二億六六〇〇万CFAフランの黒字を計上した。八八年十月からは、二車両を蛇腹でつないだ連結バスも登場させ、SOTRAはなかなか意気軒高である。

SOTRAのバスの網の目を縫って運行しているのは、民間の中小業者のボックス・カーを利用したミニバスである。SOTRAのバスと同一料金だが、運行路上ならどこでも乗せ、降ろしてくれる芸のこまかさに対抗している。ジュラ語で、このミニバスを「グバ

カ」あるいは「ディネ」と呼ぶ。ディネとは日本製のボックス・カーの商標「ダイナ」が語源だ。アビジャン市民の足として、タクシーも、かなり重要な地位を占めている。

**格安のタクシー料金**

それとわかるようにどのタクシーも車体を朱色に塗り染めている。ブラッ

ク・アフリカ諸国にはめずらしくメーター制が完備しており、しかも基本料金がわずか一〇〇CF Aフラン、それから三〇CF Aフラン単位でメーターはめまぐるしく回転するものの、市内から二〇キロ以内ある空港までも一五〇CF Aフランと格安である。したがっていわゆるマーケット・マミーも、野菜などの荷をこのタクシーのトランクに詰めこませて市場に向かう姿をよく見かける。ガソリン代が一リットル三五〇CF Aフランとかなり高いアビジャンで、どうしてこのような低料金でタクシー経営がなりたち繁盛しているのか、アビジャン七不思議の一つである。

**歩く人々**

最後に、なんといっても重要なのは人間の足である。徒歩五分の道のりでも車があればそれを利用するが、なければ一〇キロ以内でも二〇キロ以内でも平気で歩く。この人は、男も女も身長に比して足が大きいような気がする。飛行機からタクシーに至る現代交通機関が全部破壊されても何とかやっていけそうな健脚を、イボワール人はまだ失っていない。そういえば、最近見たテレビの啓蒙番組で、鉄とみると目のない鋳造業者の中に、道路標識をこっそり失敬して鍋につくりかえ販売している者がいるが、これはやはりとんだ交通事故につながりかねないから自粛すべきである、と説いていた。

(はらぐち たけひこ／アジア経済研究所在アビジャン海外調査員)